

悪霊 第二部・支那の三角帽子

悪
霊
第
二
部
・
支
那
の
三
角
帽
子

【登場人物】

- 伊集院満枝……………H市の地主の娘
猪俣佐和子……………満枝の元クラスメイト。東京で左翼活動に従事
安西小百合……………伊集院満枝の一年後輩
佳代……………貧しい農家の娘
喜代美……………女工
小沼健吾……………労働運動家。伊集院家の元小作人
篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
堀田弁護士……………満枝の法定後見人
川奈昭一郎……………満枝の元婚約者・昭三の父。川奈産業社長
伊集院太吉……………満枝の父

昭和四（一九二九）年十月。東京市、北海道H市

V

「先生」

女性事務員が入ってきた。

「なんだね」

書類に眼を通しつつ、堀田弁護士は言った。

「電報です」

「そこで、読みたまえ」

「はい」

昨年、女学校を卒業した後、堀田の事務所に雇われた女性事務員は、幼さの残る声で電報を読み上げた。

「コンヤクジ コラレタシ イジユウイン」

堀田の顔が青ざめた。書類をめくる手が止まった。

「お返事なさいますか」

女性事務員が訊ねた。いや、いい。もう下がりました。堀田は、右手を振って、追い出すように事務員を促した。事務員は一礼して去った。

堀田の額に、脂汗が浮かんでいた。見れば、かつて肥満して^{かっぴ}幅のよかったからだは見る影もなく瘦せ、額は禿げ^はあがり、顔中に深い皺^{しわ}が刻まれている。磊落^{らいらく}だった太い声は細くしわがれ、

一年たらずの間に、十歳は老けたような衰えぶりであった。
堀田の脳裏に、地獄のような光景が浮かび上がった。

あの日……。そう、昨年の夏。

堀田が法定後見人を務める伊集院満枝の許婚者いいなすけであった川奈昭三が、死体となって発見された半月後。堀田は伊集院家の洋館に赴いた。

満枝は、白いブラウスに黒いスーツ、同じく黒のロングスカートといういでたちで堀田を迎えた。髪の毛を結い上げ、沈鬱な面持ちを崩さない。

もう葬儀一切は終わったというのに、心の中ではまだ、喪中ということか。堀田はそう察した。許婚者の不慮の死。しかも、死体が発見されたのは、市内でも有名な醜業窟近くのどぶの中だったのだ。死の直前に朝鮮人醜業婦を買った事実は、満枝には伏せていたが、あるいは耳に入っているかもしれない。生意気な娘だが、まだ十八歳、相当こたえているだろう。堀田は、

「この度のことは、まことにお気の毒だったね」

応接間に通され、ソファに座った堀田は、ハンカチで汗を拭い、扇子で胸元を仰ぎながら言った。マントルピースをはさんでソファに座った満枝は伏し目がちで黙している。

「それで、今後のことなんだが……」

言葉を選びつつ、堀田は続けた。

「川奈のお父さんも、あなたのために尽力するとおっしゃっている。今回の話は、残念ながら縁がなかったということだが、今後、あなたが幸せな人生を送れるよう、いろいろと取りはからっ

ていただけるとのことだ」

「わざわざ……。わたくしのような者のために、ありがたいことです」

か細い声で、満枝は答えた。堀田は頷いた。

「前にも言ったが、わしも、川奈のお父さんも、あなたのお父さんとは、学生時代からの付き合いだ。あなたの人生については、よく考えておくから、安心なさい」

満枝は、俯いたまま答えなかった。堀田は続けた。

「それで、当面の身の振り方だが、どうするね。卒業と同時に川奈さんと結婚するものだとばかり考えていたが、こんなことになってしまった。今後、どうするべきか、わしらもいろいろ考えるけれど、一応、あなたの希望も聞いておかないとね」

「……一応ですか」

冷やかな棘とげを含んだ声音だった。堀田はややたじろいだが、すぐに笑顔を作った。

「いや、あなたもまだ女学校を出たばかりの未成年だし、なんと言っても女性だ。世間のことで分からねことも多かるう。ここはひとつ、わしらに任せて……」

堀田の言葉を遮るとどまるように、満枝は甲高く笑った。俯いたまま、右手で口を覆い、肩を震わせて笑った。

不意の哄笑に呆然となった堀田に、満枝は顔をあげ、挑むような笑顔で言った。

「笑わせていただいては困りますわ。川奈さんがわたくしのために何かしていただける？ 川奈産業は火の車、そんな余裕はないことくらい存じております。そういえば、昭三さんには弟さんがいらしたわね。今度は、その方の嫁になれとでもおっしゃりたいのでしょうか？ わたくしの

持参金を目当てに」

「ば、馬鹿な……」

「堀田のおじさまも同じ穴の貉むじなよ。わたくしの財産の一部を、事務所の経費に流用していらつしやるんでしょう？ わたくしの将来を、そんな方々に委ねるのは、まっぴらごめんですわ」

「な、何を言うんだ！」

堀田は真っ赤になって立ち上がった。

「誰から聞いた。そんな根も葉もない出鱈目でたらめを」

満枝も立ち上がった。マントルピースを避けるように堀田の前に歩み寄った。

「誰からも聞いておりません」

向かい合うと、ほぼ同じ背丈だった。満枝は、脂ぎった堀田の顔に鼻を寄せるようにして、言い放った。

「わたくし、調べましたの。いま、その証拠をお見せしますわ」

言うなり、満枝の脚が動いた。跳ね上げられた膝ひざが、堀田の股間を直撃した。

鞆丸たづまるを膝蹴りにされ、堀田の巨体こたいが、どさっと絨毯じゅうたんの上に転がった。俯うつぶせになり、尻しつぽを浮かせ、ぎゅっと眼をつむって激痛に耐えている。

ドアが開いた。篠原ヨシが、風呂敷包みを手に入ってきた。満枝がうなずくと、ヨシは風呂敷包みをマントルピースに置き、部屋の隅に下がった。

満枝はソファに座り、風呂敷包みを開けた。黒革の帳簿が二冊、出てきた。

「見覚えがございまして？」

満枝は、帳簿の一冊を、倒れたままの堀田の鼻先につきつけた。堀田は薄目を開けた。涙が溢れ出し、よく見えなかい。手で幾度も眼をこすっていたが、やがて愕然うろたとして呻うめいた。

「なぜそれが……ここに……」

手を伸ばして帳簿を奪い取るうとして、堀田は呻うめいた。からだを動かしした瞬間、股間から鋭い痛みが全身を走ったのだ。

「いまは、安静になさっていたほうがよろしくてよ。少なくともあと数時間、悪くすれば数日間、痛みは治まりませんから」

満枝は、ゆっくりと帳簿をめくった。

「昨年は、しめメて五千円ほど流用なさってますわね。その前年は四千元。父が亡くなってから八年、いったいいくら猫ねこばばなさったのかしら」

「き、貴様……」

脂汗を流しながら、堀田はやつと声を振り絞った。

「どうやってその帳簿を……」

「簡単ですわ。あなたの事務所の会計係にお願いしたの。最初は嫌がっていたけれど、おじさまと同じめに合わせてさしあげたら、おとなしく差し出してくださったわ。二重に帳簿をつけるのは、法律違反ではなくて？ これをしかるべき場所に提出すれば、横領罪に問われることは間違いないわね」

堀田は押し黙った。顔を絨毯に埋めている。肩が小刻みに動いていた。やがてかすかな嗚咽うめきが、喉から漏れてきた。満枝は勝ち誇ったように言った。

「お泣きなさい。あなたは、十八の小娘に負けたのよ。わたくしがその気になれば、おじさまは破滅ね」

「や、やめてくれ……」
堀田は呻いた。

「頼む……」

「わかっておりますわ。おじさまにはお世話になったんだもの。警察に突き出すなんて恩知らずな真似は致しません」

満枝は、部屋の隅に立っているヨシに命じた。

「氷嚢ひょうのうを持ってきて差し上げて」

冷たい氷嚢を股間にあてがっているうちに、次第に苦痛が和らいできた。堀田は、やっと絨毯から起きあがり、ソファに座った。

だが、蹴られた箇所には、執拗に激痛が残っている。腹の筋肉が鈍い痛みを伴って収縮し、嘔吐がこみあげてくる。上半身を起こしているのがやっとだった。

「ねえ、おじさま」

満枝は、帳簿を風呂敷に包み、ヨシに持っていくように命じた。ヨシが退出するのを確かめてから、言った。

「ひとつ、お願いがございますの」

堀田は、わずかに眼差しをあげて、満枝を見た。満枝は続けた。

「今後は、わたくしが言った額だけ、理由は問わず、すぐに銀行から引き出していただきたいの」

「それは、これまでだって……」

「一万円でも？」

堀田はぎよつとして顔をあげた。そこそこ不自由なく暮らせるサラリーマンの月給が百円だった時代である。

「そんなにも……いったい何のために……」

平手打ちが飛んできた。満枝が腕を伸ばし、堀田の頬を叩いたのだ。

堀田は、怯えた面差しで硬直した。

「質問は無用よ。わたくしが一万円と言えば、何も問わずに引き出せばよいのです」

わかりましたか？ 念を押され、堀田は気圧けおされたように頷いた。

「よろしい。さっそく銀行にいったって、すぐに一万円を持ってきてください」

「いや、明日から当分、多忙で……」

堀田の抗弁は、悲鳴とともに遮られた。満枝が立ち上がり、堀田の頭髪を掴んで引つ張ったのだ。満枝は、泣き叫ぶ堀田を床に転がした。堀田は仰向けに倒れた。その股間を、満枝は踏み込んだ。堀田は絶叫し、からだをのけぞらせ、激しく痙攣けいれんした。

「口答えは許しませんよ」

しばし踏みつけ、爪先つまさきで蹴りつけた。堀田は、両手で股間を抑え、転げまわった。

満枝はソファに座った。頬を紅潮させ、息づかいも荒く、悶え苦しむ老人の姿を、嘲るような

笑みで見守った。

どのくらい時間が経ったのだろう。やっとからだを起こせる程度には回復したが、もはや気力など残っていないかった。

十八の小娘に横領の証拠を握られ、あまつさえ、急所を蹴られて悶絶するという醜態をさらしたのである。

頭の中は真つ白だった。からだを動かすことも、脳を働かせることも、何もできない。ただ、生傷を抉るような痛みと、心を蝕む屈辱を、耐えることしかできなかった。

絨毯に座り込み、背中を丸め、半ば開いた唇から垂れ落ちる涎にも気づかない。

伊集院満枝はソファに座っていた。その向かいに、使用人の篠原ヨシがいた。マントルピースの上に置いたチェス盤に並んだ駒を動かしている。

「チェックメイト」

ヨシが静かにいった。満枝は盤をしばし見つめ、溜息をつけてソファに背をもたせかけた。

「負けたわ……ヨシにはかなわないわね」

「お目覚めのようですよ」

ヨシにそう言われ、満枝は堀田を一瞥し、微笑んだ。

「堀田のおじさま、お具合はいかが？」

堀田は答えず、俯いた。満枝を正視することすら出来なかった。

「お苦しいでしょうけれど、我慢なさって。父は、もっと苦しい思いをなさったのだから」

堀田は顔をあげた。

父……？

訝しがる堀田に、満枝は続けた。

「そう、父。母に、わたくしを生ませた伊集院太吉。彼がどのように死んだのか、わたくし、存じておりますのよ」

伊集院太吉は、八年前の夏のある夜、思い立ったように小作人たちが耕している田畑を見に行くと洋館を出、それきり行方不明となった。その翌日、小作地から少し離れた川の水面に、死体となって浮かんでいるのが見つかった。

太吉は、したたかに酒を呑んでいたらしい。酔って、川に落ちたのだろうと推定された。横暴な太吉に恨みを持った小作人の犯行ではないかと疑われたが、死体には外傷もなく、確たる証拠もあがらないまま、事故死として片づけられた。

堀田も、それ以上のことは何も知らない。

「父は、事故で死んだということになっていますけれど、ほんとうは違います。父は、殺されたんです」

眼を見開いた堀田に、満枝は静かに言った。

「ここにいる、ヨシの手で」

その大理石のような美貌には、躊躇いも、動揺も、憎しみも、あらゆる人間の感情らしきものは浮かんでいなかった。

満枝に向かい合って座る篠原ヨシは、静かに盤上のチェス駒を片づけている。
「ま……まさか……」

呆然と呻く堀田に、満枝は言った。

「ほんとうですわ。他ならぬヨシから聞いたんですもの。ねえ」

促され、ヨシは無言で頷いた。

「おじさま。覚えてらっしゃらないの？」

「……何をだ？」

「このヨシのこと。十年前、あなたたちが、彼女に何をなさったか、ほんとうに覚えてらっしゃらないの？」

堀田は、痺れたままの脳を必死で動かし、記憶を蘇らせようとした。かつて、伊集院家には大勢の使用人がいた。太吉が亡くなり、母親が精神を病んで離れに幽閉されてからは、次第に使用人の数は減り、ただ独り、篠原ヨシが残って家事をこなしていた。無口だが働き者の三十女。それ以上のことは何も知らない。

「ほんとうに知らないみたいね」

満枝は、ヨシに眼差しを向けて問うた。

「ヨシはどう思う？」

「何も」

ヨシは首を振り、付け加えた。

「愚劣な男……それだけです」

「あなたが受けた仕打ちを考えれば、いま、この男を殺しても罪にはならないと思うわ」
さらりと云つてのけた満枝に、堀田の全身が凍った。

「殺す価値すらありません」

ヨシは言った。

「わかったわ」

満枝はソファを離れ、床に座り込んだまま、瞬きもせず唇を震わせる哀れな老人の傍らに立つた。

「おじさま、よかったわね。ヨシは寛大だから、命だけは助けてさしあげるそうよ」

「い……いったい……」

堀田の眼から涙が溢れ出した。

「わ、わしは何をしたというんだ……なんのために、こんなことを……」

満枝は腰をかがめ、その頬に平手打ちを喰わせた。堀田は、身を追って号泣した。

「忘れたのなら、思い出させてあげる。十年前あなたは、父と、川奈昭三の父親と、三人で、このヨシを犯したのよ！」

やっと記憶が蘇った。

あの夜、堀田は、H市内のピアレストランで、伊集院太吉と、川奈昭三の父親である川奈昭一郎と三人で、したたかにビールを呑んでいた。
最近の小作人は生意気だね。

太吉がそう言い出した。

一月ほど前なんだが、わしが馬車で小作地を視察していたら、突然道に飛び出してきた女がいたんだ。何をするかと思つたら、小作料を上げるとわめく。二十歳になるかならぬかの小娘がだほう。川奈昭一郎が言った。近頃は、そんな貧農の小娘までが、アカにかぶれているのかね？ そうなんだよ。太吉が憤慨した。

で、その小娘をどうしたんだ？ 堀田が訊ねた。

家の使用人にしてやったよ。太吉は答えた。

おいおい、柄にもなく慈悲を見せたな。そんなにきれいな娘かね。川奈昭一郎が訊ねた。

いかな君。堀田が口を挟んだ。わしも、会社側の代理人として、幾度も労働争議に立ち会つたが、ああいう連中は甘やかすとつけあがる一方だ。手綱を緩めてはいかんよ。

なに、大丈夫さ。太吉はにやりと笑つた。大勢の小作人の前でわしの顔に泥を塗つた女だ。許すつもりはない。いずれ、懲らしめてやろうと思つてるんだ。

それから先は、酒の勢いというしかない。すぐさま、「懲らしめ」を行うこととなつた。堀田と川奈昭一郎は、太吉とともにタクシーに乗り込み、伊集院家の洋館に入り、その小作人の娘に襲いかかったのである。

娘は齒を食いしばり、声も立てず、涙も見せず、三人の男たちの陵辱に耐えた。ときどき向ける恨みの眼差しに、男たちは「生意気な！」と頬を殴りつけた。殴りつけても、娘は屈しようとはしなかった。

その娘が、篠原ヨシだったのか……。

伊集院家に赴く度に、ヨシは無表情でドアを開け、無表情で居間へと導き、無表情で茶菓や料理を運んでいた。

堀田を、自分を辱めた男の一人と分かつていながら……。

「思い出されたようね」

満枝の声に、堀田は回想から現実に戻された。

「父が亡くなつたのは、あなたたちがヨシを手込めにした一ヶ月後よ。事故ということになつていたけれど、わたくし、父のお葬式の時、聞いてしまったの。小作人たちが、ひそひそ噂しあつていたわ。わたくしの父は、父を恨む何者かの手によって、鞆丸を潰されて死んだ、と」

戦慄とともに、再び堀田の鞆丸を痛みが突き抜けた。

「ば……ばかな……」

堀田は口ごもつた。

「警察医がちゃんと調べて、外傷はなかったと……」

「よほど間抜けなお医者さまだつたようね。とにかく、父が殺されたのは事実よ。これからほんとうのことを話して差し上げるから、黙ってお聞きなさい」

満枝はソファに座り、面差しを変えぬヨシとともに、チェス盤に駒を並べ始めた。

「その噂話を聞いて、わたくし、思いついたの。殺したのは、ヨシじゃないかと。なぜか分かります？ 実はわたくし、見てしまったのよ。父やあなたたちが、ヨシを手込めしているのを」

駒を並べ終え、ヨシはすつと駒のひとつを動かした。満枝も動かしながら続けた。

「ヨシと二人きりになって、聞いたの。わたくし、ヨシとは仲良しだったから。ヨシは、観念し

たように告白してくれたわ。わたくしが殺しました、どうぞ警察に突き出してください、と。でも、わたくしはそうしなかった。それより、女のヨシが、男である父をどうやって殺したのか、とても興味があった。訊ねてみると、ヨシはこう言った。あの夜、ヨシは久しぶりに実家に帰った。弟や妹に、おみやげを持ってね。すると父が、いきなりその家に現れたの。お酒を吞んでいて、ヨシに、すぐに来い、と怒鳴ったそうよ。おそらく、家に連れて帰って慰みものにするつもりだったのでしょう」

ヨシの小さな吐息が、かすかな音を立てて吐き出された。彼女が初めて見せた、感情のたかぶりだった。

「ヨシは、父の要求に応えるふりをして、家の外に出た。家の外には馬車が止まっていた。父は、川のほとりまで馬車を走らせ、いきなりヨシに抱きついた。馬車のなかで、ヨシを手込めにしたかったんでしよう。そしてヨシは……」

「きんたまを、潰してやったんだ！」

ヨシが、チェス盤上の駒を手で薙ぎ払い、立ち上がった。

「きんたまを掴んで、ひねってやった。そしたら、あの男、気絶した。だから、そのまま川に突き落としてやったんだ！」

ヨシは目をつむり、両腕で自らのからだを押さえつけ、震えていた。満枝は、そっとヨシを抱きしめ、宥めるように手で撫でさすった。

「お嬢様！」

ヨシは涙ぐんで叫んだ。

「やっぱり私、許せません！ この男を殺してやりたい！ あの男も……川奈昭一郎も、同じように殺してやりたい！ お嬢様が二十歳になるまでは、この男が財産を管理するのだからと言われて、堪えてきましたけれど……やっぱり私……」

「わかったわ、泣かないで」

満枝は、ヨシの頭を抱いた。ヨシは、満枝の胸に顔を埋め、号泣した。

「堀田のおじさま」

満枝は、ヨシを抱擁したまま、冷ややかな眼差しを堀田に向けた。

「今日はこれきり、帰っていただくはずでしたけれど、それではヨシの気がすみません」

「まさか……」

堀田は、喉の奥で悲鳴をあげた。

「こ、殺すのか……」

「よく考えたら、それも都合が悪いわね。やはりおじさまには、わたくしが二十歳になるまでは、しっかり財産を管理していただかないと」

「そ、それじゃ……」

「ねえ、ヨシ」

優しく声をかけられ、ヨシは顔をあげ、涙に濡れた眼を満枝に向けた。

「この男は、やはり生かしておかないと、わたくしが困るの。わたくしに免じて命だけは許してやって。そのかわり……」

「はい……」

「あなたを弄もてあそんだこの男の、男としての人生を終わらせてあげるのよ」
小首を傾げるヨシに、満枝は笑顔で言った。

「きんたまを……ひとつだけ、潰してやるの」

堀田は悲鳴をあげた。立ち上がって逃げようとして、下半身に走った鋭い痛みにも、呻きながら倒れた。

その堀田を、満枝は俯うつぶせにし、馬乗りになって抑えつけた。ヨシが応接間を出て、荒縄を持って戻ってきた。二人の女は、たちまち堀田を縛り上げ、仰向けにした。

満枝は、堀田の胸にまたがった。ヨシは、堀田の腹にまたがり、ナイフでズボンを切り裂き、性器を露出させた。

「やめてくれえー！」

堀田は哀願した。

「助けてくれえ！」

満枝は、眼を見開き、肩を上下させ、頬を紅潮させ、満面の笑みで堀田を見下ろしていた。恐怖に窩あなから飛び出しそうな眼球。塩をかけられた蛞蝓なめじのようにわななく唇。そのすべてが、満枝のからだの内側で、官能の波飛沫なみじを荒れ狂わせていた。

ヨシの手が、堀田の陰囊に伸びた。右の辜丸を掴み、ぎゅっと締めつけた。

堀田の絶叫が洋館じゅうに轟いた。

老人は激しく痙攣し、のけぞった。やがて、肉の弾ける音が響きわたった。堀田は、白眼を剥むき、血反吐ちへどをはいて動かなくなった。

満枝たちは、堀田の右の辜丸を破裂させた後、車で病院に運んだ。外科医は、潰れた辜丸を摘出し、陰囊をきれいに縫合した。堀田は、一命を取り留めた。駆けつけた家族や弁護士仲間に、堀田は言った。伊集院家の帰りに野犬に襲われ、辜丸を食いちぎられた、と。満枝に強要されたとおりに説明したのだ。

半月で退院し、二ヶ月の静養を経て、堀田は弁護士業に復帰した。だが、敏腕弁護士とうたわれた頃の腕の冴えは消えた。気力にも乏しく、いつも疲れた表情を浮かべ、事務所の机に座って動こうとしない。業務はほとんど、事務所に勤める若手に任せっぱなしだった。

堀田が満枝の要請に応え、銀行から一万円を引き出して渡したのが、昨年こぞの十月。上京した満枝は、その金を、非合法活動に従事する元小作人の小沼健吾こぬまけんごに与えた。

十歳の満枝が、小沼の股間を蹴り上げたのは、相手が小沼だったからではない。

父は、辜丸を潰されて死んだ……。

小作人たちの噂話を偶然耳にした時、満枝の体内のどこかに、火が点ともった。図書館に行き、医学事典を借り出し、辜丸について調べた。そこが男性にとって最大の急所であり、破裂すれば死ぬこともあると知った。その後、父の辜丸を潰して殺したのが、同じ女である篠原ヨシだと知った時、満枝の興奮は頂点に達した。

満枝はただ、試してみたかった。学校の帰り道、父の墓に寄った理由は、彼女にも定かではない。辜丸を潰されて死んだ父。その事実が、墓に参ることにより確かめられそうな錯覚に捕らわれたとも言うしかない。

そして、そこにいたのが小沼健吾だった。男と二人きり。その状況に、満枝のからだは自然に動いた。

生まれて初めて、急所を蹴り上げて倒したその男が、彼女が資金援助している元小作人であることを、満枝は知らない。

(第二部・了)